

## 亜急性硬化性全脳炎の疫学調査

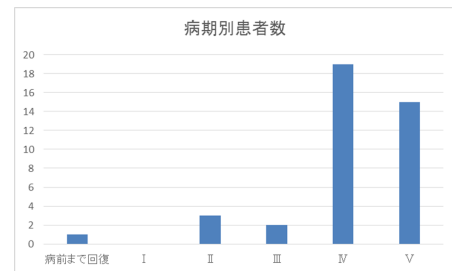
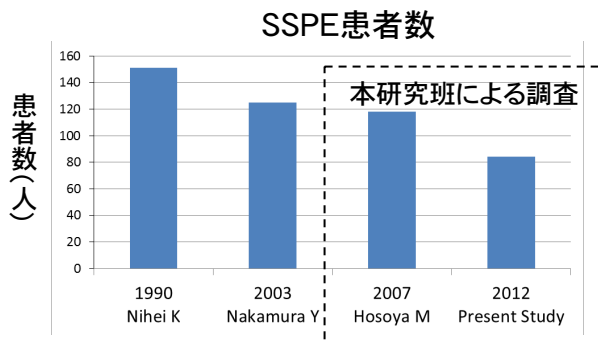
研究分担者: 東京大学医学部小児科 岡 明

### 亜急性硬化性全脳炎 全国サーベイランス調査

目的: 本疾患の患者実態の把握・新規患者の発生状況の把握  
本疾患の現状での臨床経過・治療法の選択との関連

本研究班ではサーベイランス調査を平成19年、24年と行ってきた。

- 一次調査として患者の総数把握
- 二次調査として難病診断書による情報を収集



平成24年の調査でほとんどの患者が進行したIV期、V期の状態。

平成24年の調査で我が国では麻疹対策は効果を挙げているが亜急性硬化性全脳炎は依然として新規患者が発生していることが明らかとなった。また患者は長期の罹患期間を経ており、病状も重症化している実態が明らかになった。

本研究班として平成27年度に疫学調査を行い、継続的に実態調査を行う。

研究施設 東京大学大学院医学部小児科、杏林大学医学部小児科、静岡県立こども病院、大阪府立母子保健総合医療センター、岡山大学大学院発達神経病態学、国立感染症研究所感染症情報センター

## 解 説

1. 我が国は厚生行政として麻疹の撲滅に取り組んでいるが、今後も麻疹感染後に発症する亜急性硬化性全脳炎の発生のリスクは持続している。
2. 平成24年に本疾患のサーベイランス調査全国サーベイランス調査を行い、亜急性硬化性全脳炎は依然として新規発症例があり、また患者は長期の罹病期間で重症化している実態が明らかとなった。
3. 今後も継続的に実態調査を定期的 to 実施する必要がある。